



# 日本宣教ニュース

NO. 15 2019年6月

東京基督教大学  
国際宣教センター  
日本宣教リサーチ  
発行人 山口 陽一

「この福音は、あなたがたが神の恵みを聞き、それをほんとうに理解したとき以来、あなたがたの間でも見られるとおりの勢いをもって、世界中で、実を結び広がり続けています。福音はそのようにしてあなたがたに届いたのです。」(コロサイ1:6)

## 【巻頭言】

### 「神の国マインド」による宣教協力を

日本福音同盟 (JEA)  
前総主事 品川 謙一

「時が満ち、神の国が近づいた。悔い改めて福音を信じなさい。」マルコの福音書1:15

2011年4月1日の朝、仙台バプテスト神学校で目を覚まし、石巻、女川方面の教会と避難所に支援物資を配ることから、私の JEA 総主事としての働きが始まりました。東日本大震災被災地での支援活動に関わる中で教えられたのは、具体的な支援を通して神様の愛を人々に届けることの大切さでした。避難所で「宗教はお断り」と言われるような状況の中、国内外からのクリスチャンたちが支援物資を配ったり、避難所・仮設住宅での支援活動に協力するなど、神様の愛の統治(神の国)が徐々に地域に浸透していった結果、やがて地域の方々から「キリストさん」と呼ばれて信頼される働きになっていきました。

主イエスが「神の国はあなたがたのただ中にあるのです。」(ルカ17:21)と言われたように、神の国(バシレイア=統治)のイメージは周りを境界線(国境)で囲われた領域ではなく、中心に王(イエス・キリスト)がいて、その統治が同心円状に広がっていくイメージです。水面に落ちた絵の具が広がっていくように、神様の愛の統治は境界線なく世界に広がっていきます。その中心点は私たち一人ひとりの魂です。私たちがイエス様の十字架の愛に触れられて魂の変革を経験し、悔い改めて福音を信じる者として生き始めた時、私たち自身の中に神様の愛の統治(神の国)が広がり始め、その神の国は私たちを通して、家族、友人、学校、職場、地域などに浸透していきます。被災地で経験した神の国の広がりもそのようなものでした。

このように十字架の福音を中心に世界に染み込んでいく神様の愛の統治をイメージすることが「神の国マインド」による宣教協力の大切なポイントだと思います。ただ違いをこえて協力するというのではなく、その中心に主イエス・キリストの十字架の愛による魂の変革が共通のベクトルとしてあることを確認し、その福音主義信仰(Evangelical faith)の中心ベクトルの明確さゆえに、その魂の変革をもたらす神様の愛の統治(神の国)が前進していくためなら、他の違いを乗り越えて力を合わせていこうというのが「神の国マインド」による協力であり、そこがいわゆるエキュメニズムによる協力とは異なる点だと考えています。

また「神の国マインド」による宣教協力は、神の国の視点から物事を見るということでもあります。世界宣教の到達度を示す一つの指標として未伝ピープルグループ(Unreached People Group)という考え方があります。その情報を公開しているジョシュアプロジェクトのウェブサイト(<https://joshuaproject.net/>)によれば、日本人はバングラデシュのシャイク族に次いで世界で2番目に大きな未伝ピープルグループです。日本語を話す、ある

いは日本に住むクリスチャンとして神の国から派遣された私たちは、皆この日本に住む人々に福音を伝える使命を与えられており、主イエスに報告する義務を負っています。この神の国の視点から見れば教会も宣教団体も、日本国内で日本人に伝道している教会も、海外で日本語を話す人々（外国籍の方も含む）に伝道している教会も、日本国内で外国語を話す人々を通して日本人家族や友人たちに伝道している教会も、同じ責任を共有する同労者であると言えるでしょう。このような（福音による魂の変革を中心ベクトルとした）「神の国マインド」による宣教協力が広がっていくよう願っています。

JEA 総主事として奉仕させていただいた8年間、福音宣教のために労苦を共にする素晴らしい方々との出会いに恵まれました。皆さんの祈りと協力なしにできなかった働きであったと改めて思います。小さく欠け多き者のために、これまで祈り、ご協力くださったお一人おひとりに心から感謝すると共に、新たにこの働きを担ってくださる岩上敬人新総主事のためにも、さらなるお祈りとご協力をお願いいたします。

（現在、日本キリスト合同教会 東浦和教会 協力牧師）

## 【JMRレポート】

今回の JMR レポートは、「[終活]Style(Vol.2号)」((株)創世 ライフワークスメディア出版社、2019年6月)に掲載された記事から転載させていただきました。  
また、『中外日報』のオンライン情報からも、記事を転載させていただきます。

### 「キリスト教会のパラダイムシフト」

東京基督教大学国際宣教センター  
日本宣教リサーチ 柴田初男

#### 1. 2025年問題のカウントダウン

昨年発行された「[終活]STYLE」の創刊号に、私は「2025年問題とキリスト教会」と題した拙文を載せていただいた。その後、現状はどのように変化しているか見てみたい。

『平成30年版高齢社会白書』によれば、我が国の総人口は、平成28(2016)年10月1日現在1億2,693万人、65歳以上人口は、3,459万人であったが、平成29(2017)年10月1日現在では、それぞれ1億2,671万人、3,515万人になっている。

そして、総人口は長期の人口減少過程が続き、2029年に人口1億2,000万人を下回った後も減少を続け、2053年には1億人を割って9,924万人となり、2065年には8,808万人になると推計されている。

一方高齢者人口は、「団塊の世代」が65歳以上となった平成27(2015)年に3,387万人となり、「団塊の世代」が75歳以上となる2025年には3,677万人に達すると見込まれている。それに伴い、65歳以上の総人口に占める割合(高齢化率)は、平成28(2016)年の27.3%から平成29(2017)年には27.7%に増加しており、2025年には30.0%に達し、2036年には33.3%となって3人に1人が65歳以上になると見込まれている。

また、65歳以上人口の増大により死亡数と死亡率(人口1,000人当たりの死亡数)は上昇を続け、死亡者は平成28(2016)年約130万人、死亡率は10.5であったのが、2025年には、死亡者152万人、死亡率12.4になると推計されている<sup>1)</sup>。

このような数字を見る限り、2025年問題へのカウントダウンは、緩やかではあるが着実に進んでいると言えるのではないかと思われる。

<sup>1)</sup> 内閣府『平成30年版高齢社会白書』(平成30年7月)

## 2. キリスト教会の現状

では、日本のキリスト教会の現状はどうだろうか。現在、キリスト教会の数は、カトリックが 970、プロテスタントが約 8,000 で、信者数は、カトリック約 44 万人、プロテスタント約 60 万人、オードックスの 1 万人を加えて合計 105 万人で、全体的には大きな変化はないと言える<sup>2</sup>。

しかし、日本のプロテスタント教会を代表する日本基督教団の教勢の推移をみると、その低落傾向が如実に表れている。日本基督教団は、1941 年に日本のプロテスタント教会 34 教派の合同によって成立したが、戦後多くの教団・教派が日本基督教団から離脱していった結果、教勢も大きく減少した。

しかし、戦後のキリスト教ブームや活発な伝道活動等によって教勢を回復し、20 年後には信徒数が戦前と同程度の 20 万人、教会数も 300 以上増加して 1,600 台にまで回復したが、1970 年代以降の教団紛争等の影響もあり信徒数は再び減少した。その後はやや持ち直して増加傾向を示したものの、1992 年をピークに低落傾向が続いている。それまでは、受洗者数が召天者数を上回っていたので増加傾向にあったものが、1995 年以降、召天者数が受洗者数を上回るようになったため減少傾向に転じたもので、このままでは自然減に陥る危機的な状況に陥っている。

日本基督教団の受洗者数は、戦後間もない頃のキリスト教ブームの時は、年間受洗者数が一万人を越え、一教会当たりでも 10 人前後あったのが、今や約 1,000 人前後であり、一教会当たり 1 人に満たない状況である<sup>3</sup>。

従って、前回にも述べたように、これは単に日本基督教団だけの問題ではなく、総じて一般社会よりも高齢化率が高いキリスト教会においては、すべての教会が伝道力（受洗者を産み出す力）を回復し、毎年受洗者を産み出す教会へと変革していくことが喫緊の課題となっている。

## 3. キリスト教会のパラダイムシフト

上記のように、教勢等の数字的な面からは押しなべてマイナス要因の話が多いのが現状であるが、キリスト教会にとってより本質的な問題は、教会がいかなる存在として形成され、主から託されている使命や責任を十分に果たしているかどうかという教会の在り方の方が、より重要な問題である。

教会は、立てられた地域において、「地の塩・世の光」となるように召されている。そして、「ローザンヌ誓約」以後示された宣教観、教会観によれば、それぞれの地域に神によって派遣された宣教の民である教会が果たすべき務めとは、「言葉による伝道」のみではなく、「行為・良き業」によってなされる「社会的責任」を遂行することにより、この世に和解と正義と平和をもたらすとともに、「地域に仕え、隣人と共に生きる教会」へとパラダイムシフトして行くことが必要であると言われている<sup>4</sup>。

すなわち、従来の「伝道のみ」という宣教観から脱皮して、より全人的・包括的な宣教理解に立ち、地域に仕え、地域と共に生きる教会へとパラダイムシフトして行くことが、今求められていると言える。

図は、教会が「神の国共同体の構築」を目指して、「宣べ伝える教会」から「地域に仕える教会」、さらには「地域と共に生きる教会」へとパラダイムシフトすることを、三次元の図として示したものである。

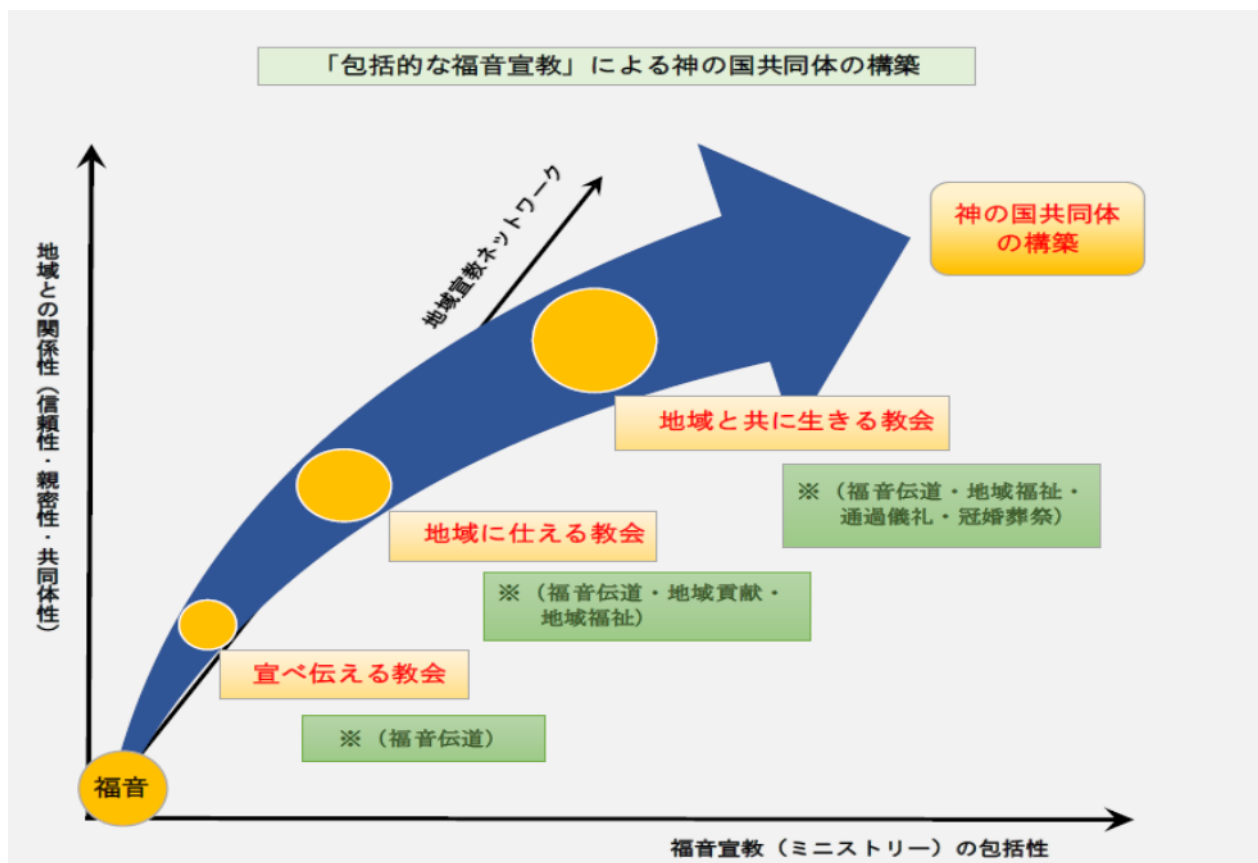
ここで、横軸の「包括的な福音宣教」のミニストリーの展開と縦軸の地域との関係性（信頼性・親密性・共同体性）とは、相関関係にあるということであり、その活動を後押しし、さらに広範囲に展開していくためには、「地域の宣教ネットワーク」が不可欠だということを示している。

---

<sup>2</sup> 日本宣教リサーチ「JMR 調査レポート（2018 年度）」（2019 年 4 月）

<sup>3</sup> 第 6 回日本伝道会議「日本宣教 170▶200 プロジェクト」『データブック 日本宣教のこれからが見えてくる』（いのちのことば社、2016 年）p.16

<sup>4</sup> 同上 p.85



すなわち、教会のミニストリーが、包括的になればなるほど、地域との関係性は自ずと深められていくことになり、また、地域との関係性が深められれば、否応なしに教会は包括的にならざるを得ない、ということになる。しかし逆に言えば、包括的なミニストリーを展開したいと思っても、地域との関係性が深められていなければ、思うように展開はできないということにもなる。

こうしたことを単に言葉で言うのはたやすいが、そのことを本気になって実践してこなかったところに日本宣教の問題があると言っても過言ではないと思われる。

今まで日本の教会は、どちらかという地域との関係性を余り考慮することなしに、一方的に福音伝道を展開してきたきらいがある。「地域に仕える教会」として地域の人々の全人的なニーズに仕えることは、キリストに仕えること（マタイ 25：40）であり、通過儀礼や冠婚葬祭等の宗教的ニーズに対し、神の家族としての共同体（コイノニア）として、「喜ぶ者といっしょに喜び、泣く者といっしょに泣く」（ローマ 12：15）ことは、キリストの愛の実践である。

結婚式については、全国（推計値）で 55.4%、首都圏では 64.5%がキリスト教式（教会式）で行われているが<sup>5</sup>、葬儀については、特に未信者の葬儀に関しては、どちらかと言えば教会自らがその扉を閉ざし、積極的には受け入れようとはしてこなかったきらいがある。近年、仏式葬儀への反動もあって、葬儀の多様化、簡略化、小規模化が進み、葬儀の在り方が急速に変化している。しかしそうであっても、故人を悼みつつ遺族の喪失感、悲嘆に寄り添い、真の慰めに満ちた言葉を語り、遺族の深い悲しみを癒す葬儀の必要性は高まるこそすれ、決して薄れることはないと言える。

そのような葬儀にキリスト教会がどう取り組むかは、超高齢社会、多死社会を迎えた我が国において、「地域に仕える教会」「地域と共に生きる教会」としての在り方が問われることになるのではないだろうか。

<sup>5</sup> (株)リクルートマーケティングパートナーズ「ゼクシィ結婚トレンド調査 2018」（2018 年 10 月）

## 中外日報の新聞記事から【2019年1月～2019年4月】

なぜ「布教」をネガティブに 善き行いに踏み出す自信を

東京工業大教授 弓山達也氏

3月11日【中外日報 時事評論】

昨年末から今年にかけて「現代における宗教の役割研究会（コルモス）」や国際宗教研究所の企画に出席した。最近ではいろいろな分野でアクティブラーニングが叫ばれているせいか、こうした大きな集まりでもグループディスカッションや交流会のような場面があって、宗教者の「遠慮」「躊躇い」のような本音に触れることがあり、思うところがあった。

コルモスでは死刑がテーマの一つとなり、7、8人の少人数のグループディスカッションで、筆者は宗教者こそが教誨活動のような罪を犯した者への寄り添いととも、犯罪被害者への支援をしてはどうかと問題提起を試みた。ちょうどコルモス開催の直前のクリスマスイブに、アイドルユニット「ももいろクローバーZ」のライブに犯罪や事故で親を亡くした子どもたちが招待されたという報道に触れたことが念頭にあったからだ。

グループは、筆者以外は全員宗教者だったが、宗派内でこうした活動をしているのを聞いたことがないといい、同時に一人も賛同を示さなかった。理由は「布教と思われるから」だった。同じような場面が社会的なマイノリティーや地域の人々への宗教者の関わりを検討した国際宗教研究所のシンポジウムでもあった。2月27日付の本紙社説で記されたように、こうした活動のつまずきとなっているのは同じ宗教者からの無理解であるとともに、一般社会からの「布教目的ではないか」という疑義だという。いったい、宗教者が布教をして何がいけないのだろう。

第一に考えられるのは、善意に基づく行為と個人や団体の利益を結び付けてはいけないという発想である。しかし、そもそも布教は個人や団体の利益のために行われるものだろうか。宗教の公共性が取り沙汰されて久しいが、もし宗教に公共性があるのなら、むしろその恩恵の機会が増えることは望ましいことではないだろうか。

第二に布教を宗教者がネガティブにとらえていることは、もっと単純に本紙社説が言うように「行政や一般の人たち」の目が気になるだけ、つまり遠慮なのかもしれない。しかし、さきの子どもたちを招いた（正確には招待したのは警視庁だが）ももクロを「売名行為」とか、「営利目的」と（たとえそうだとしたとしても）非難する人たちを筆者は寡聞にして知らない。

善き行いをしようとする時に躊躇いを感じることは誰でもよくあるし、独善に陥らないためにも必要なことなのかもしれない。しかし死を典型例とする苦難をどう意味づけて慰撫するのか、あるいは善悪をはじめとする価値に、いかに関わるかは、長く宗教の得意分野だった。世俗のセクターがそれにとって代わっても、宗教が強い力を持っている領域だと思う。

世間から「布教と思われるから」と遠慮し、宗教の持っている力を発揮できないでいるからこそ、世間から宗教の存在意義を問われ、宗教者が萎縮するという負の螺旋があるような気がする。善き行いに踏み出すことで、世間もそれを認め、それが宗教者の自信につながるようなスパイラルを生み出せないかと思う。

### 寺院護持の意味 現代社会に必要な仏法

4月3日【社説】

相次ぐ政府の学制改革に宗門学校が対応を迫られていた頃。1908（明治41）年3月、臨済宗妙心寺派機関誌『正法輪』の「禅宗と教育」に関するアンケートに、東京朝日新聞の記者だった杉村楚人冠は次のような回答を寄せた。

「一個半個参玄の上士を打出せんことを思わずして、無暗に坊主を多く作り、用にも足らぬ法寺を保存せんことを思えばこそ斯る問題も生ずるなれ…、今の禅僧と今の寺と皆な盡く滅び去って、此に初めて『禅宗の教育』成る也」

杉村は高嶋米峰らがピューリタンの名を模して立ち上げた「仏教清徒同志会」に加わり、雑誌『新仏教』を創刊して、仏教界の改革を唱えたジャーナリスト。

遠慮会釈のない極論だが、「一個半個参玄の上士（数はわずかでも悟りに達した者）」など禅宗の価値観を押さえており、建前論として共鳴する禅僧は当時でもある程度いたはずだ。この種の見識の持ち主は、今の仏教界でも存在するだろう。

社会から必要とされないものは消える。宗教的真理は別として、長い目で見れば寺や神社も例外ではない。仮に文化財として命を永らえても、そこに宗教的真理の担い手がいなければ意味はない。

文化庁が進める不活動宗教法人対策は、まさに必要とされないものは消していく、という論理だ。法人格は宗教団体が権利・義務の主体になるための法的資格だから、社会との交渉がなくなれば不必要であり、不活動法人の整理はある意味で当然といえる。

かつて仏教界では宗教法人解散を廃寺のイメージで捉えて強い抵抗感を示す人もいた。1995年の宗教法人法改正後、文化庁が不活動法人対策として備え付け書類提出義務化を説明した時、改正時の宗教法人審議会委員だった某宗派の宗務総長は、先人が護持してきた寺を簡単に廃するわけにはいかないと不満を述べていた。

こうした不満は、寺門護持に尽力する多くの宗門人の感覚につながる。檀徒が少なく経済的に厳しい寺院を兼職の収入で支えているような住職なら、遠い未来のことはいざ知らず、「皆な盡く滅び去って」といった切り捨て方は決してできないはずだ。

社会に不必要なものは社会から消え去る——先師が守り続けてきた寺は護持しなければならない。これは、もちろんジレンマではない。宗教的真理を説き、耳を傾けてもらうには難しい時代だが、いま、社会に最も必要とされるのは仏法だ、という信念で教化に取り組むことが、強く求められている。

## 教団・教派、宣教団体の機関紙・ニュースから

### カトリック中央協議会 日本司教団関連文書

#### ともに喜びをもって福音を伝える教会へ

「福音宣教のための特別月間」（2019年10月）に向けての司教団の呼びかけ

キリストにおいて兄弟姉妹である皆さんへ

#### はじめに

カトリック教会は、毎年10月の最後から2番目の主日を、「世界宣教の日」と定めています。教皇フランシスコは、今年10月を、「福音宣教のための特別月間」とすることを宣言されました。この特別月間は、今から100年前、悲劇的な大戦後の1919年に当時の教皇ベネディクト十五世が「諸国民への宣教」を強調した使徒的書簡『マキシムム・イルド』と関連しています。そこでは、「聖なる生活と善行を通して、主イエスをより広く告知し、イエスの愛を広めることこそが宣教活動の目的」であることが説かれています。そこで、教皇フランシスコは、全世界の教会が「喜びを特徴とする福音宣教の新しい旅の段階」に向かっていくよう呼びかけています。

日本の教会は、教皇と福音宣教省の呼びかけに応じて、次に提示する事例を参考にしながら、創造的な取り組みを始めていきたいと思えます。

### ①福音宣教をする教会の魂

教皇フランシスコは『福音の喜び』の中で、聖霊降臨の出来事を思い起こし、聖霊こそが、「福音宣教をする教会の魂」であり、「聖霊の働きに対し恐れることなく自らを開いている福音宣教者」となるために、日々、聖霊に祈ることを薦めておられます。

この度、「ともに喜びをもって福音を伝えるための祈り」を作りました。地元の観想修道会の兄弟姉妹の協力を願いつつ、全教区で、祈りによって宣教活動を支えていきましょう。

### ②イエスと出会い、ともに出向いていく

福音宣教の第一の動機、それはわたしたちが受けているイエスからの愛です。イエスの愛を受け、その救いの喜びに生かされるために、わたしたちは、秘跡、とくにミサにおけるイエスとの人格的な出会いの恵みを大切にしましょう。また、聖書通読、みことばの分かち合い、黙想会、聖体礼拝、聖体訪問なども、そのための有益な助けです。

さらに、イエスとの人格的な出会いの喜びを、日常生活の中で神と隣人への愛として広げていくために、わたしたちは出向いて社会の福音化に奉仕します。今日の日本の文化や社会の中には、すでに福音的な芽生えもありますが、多くの人々を弱い立場に追いやり、抑圧、差別している現実もあります。キリストの力でこの芽生えを育て、全ての人を大切にする社会と文化に変革する福音の担い手になりましょう。

### ③殉教者や聖人の生き方に倣う

聖フランシスコ・ザビエルによって福音の種が蒔かれてから今日に至る歴史の中で、日本の教会は、日本26聖人殉教者をはじめ、聖トマス西と15殉教者、日本205福者殉教者、福者ペトロ岐部司祭と187殉教者、福者ユスト高山右近殉教者という数多くの模範を、「信仰の礎」としていただいています。

また、これらの殉教者の信仰を受け継ぎ、浦上四番崩れ（1867年）に端を発する明治初期のさらなる迫害によって、西日本の22か所に流配され、信教の自由のために命をささげた人々もいました。彼らの中で、津和野の証し人37名の列福に向けた動きも始まっています。

また、第二次世界大戦前後の困難の中で、宣教のために力を尽くした聖マキシミアノ・マリア・コルベ司祭、尊者であるチマッチ司祭や北原怜子さんの生き方は勇気を与えています。日本の教会にとって、彼らの信仰の模範は、弱い人間を支える神のいつくしみと力を示す優れた証しです。

このような列聖・列福された聖人や殉教者、そして尊者の他に、とりわけ250年にも及ぶ禁教時代に互いに支え合って信仰を伝えた名もなき先達の信仰にならい、彼らをわたしたちの宣教活動の模範と励みといたしましょう。

### ④「諸国民の宣教」に関する研究や養成

第二バチカン公会議後の文書や教皇パウロ六世の使徒的勧告『福音宣教』（1975年）の精神を土台にして、かつて、日本の教会で行われた「福音宣教推進全国会議（NICE）I（1987年）・II（1993年）」の提言を再読し、それ以降の宣教活動のあり方を振り返ることも有益です。

同時に、わたしたちが現在、置かれている文化、歴史、社会などの背景を考慮しながら、新しい視点で、日本の人々にキリスト教の救いの意味をどのように解き明かすことができるのかについて、ともに考え、分かち合ひましょう。

また、司祭や修道者の召命を促進し、信徒の宣教者、カテキスタ、教会学校のリーダーなどの養成にも力を注ぎつつ、「一人ひとりが宣教者である」という意識を深めましょう。

## ⑤宣教活動に従事するキリスト者の支援や国内外の災害復興支援

宣教のために助け合った初代教会の信者たちの模範（使徒言行録2・43-47）を思い起こしながら、世界の教会とともに、国境や地域を越えて宣教活動に従事するキリスト者を、祈りや献金などによって支援しましょう。「日本カトリック信徒宣教者会」の活動への支援、また「世界宣教の日」、「宣教地召命促進の日」、「世界子ども助け合いの日」などに毎年行われている祈りや献金は、教皇庁宣教事業を支える手段となっています。

また、日本の教会全体を挙げて取り組んできた、東日本大震災やその他の自然災害からの復興支援と被災者への祈りを、これからも続けてまいりましょう。

## 結び

教皇フランシスコは2019年11月に日本を訪問する意向を示されています。わたしたちは、教皇の訪日を日本の教会に向けられた「神の恵みの風」とうけとめ、「全世界に行って…福音をのべ伝えなさい」（マルコ16・15）というキリストの呼びかけに答えて、「新たな熱意、手段、表現をもって」、絶えず全力で福音宣教に取り組む決意を新たにしたいと思います。

## ともに喜びをもって福音を伝えるための祈り

喜びの源である神よ、  
あなたは、御子キリストを遣わし、  
その受難と復活を通して、救いに導く喜びの福音を  
この世にもたらしてくださいました。  
また、あなたは、キリストの後に従う働き手を通して、  
諸国の民に福音を告げ知らせ、どんな逆境にあっても、  
キリストを信じる人々の喜びを支えてくださいました。  
さまざまな困難に直面している現代社会の中で、  
人々の救いに奉仕する教会を顧みてください。  
キリストの救いの喜びを  
新たな熱意、手段、表現をもって伝えることができるよう、  
わたしたちを聖霊によって強めてください。  
わたしたちの主イエス・キリストによって。アーメン。

2019年3月17日  
日本カトリック司教協議会

## 日本基督教団「教団新報」

【4895号】第41総会期 第2回常議員会（2019年1月26日）

### 機構改定の方向性について、初のまとまった協議

常議員会初日、教団機構改定についての協議会が持たれた。会の冒頭で、進行役の雲然俊美書記が、協議会の意図は「これまでの議論の流れと進み具合を今総会期の常議員会で共有する」こと、目的は「率直な意見を出し合って今後の方向性を定める」ことで、何らかの決議に達することではないと伝えた。さらに、今期の常議員会は、次総会で機構改定を議案として上程することをめざして話し合いを進めたいと述べた。

協議は、各自が教団財政問題に危機感を持ち、自身のこととして深刻に受けとめようとの強い呼びかけから始まった。それに対し「教団が残っても全国の教会がなくなってしまう意味がない。伝道の主体は各個教会なので、各個教会存続の問題を教団存続の問題とどうつなげるかが機構改定の柱の一つだ」との意見が出された。教会・教区・教団の働きが重複



するために生じる無駄を整理し、それぞれにしか出来ない務めを見定めようと述べた。教団にしか出来ない役割の絞り込みが、改定実施の道を開くとの見解である。

実施には教団の一致が不可欠なので、沖縄教区の復帰と北村問題の解決を今総会期にと望む声があったが、課題を財政問題に絞り込んで進めようとの意見が繰り返し出された。「伝道の命の回復」には必ず経費が生じ、「お金の問題が付いてくる」からである。常議員会は、『骨子案』の教団組織のスリム化や全国献金といった財政的提案をより良いものにして次総会で議案上程する責務を負うと、常議員会の責任が強調された。

教団と教区を分ける考えに対し、地方から都市の教区へと移住する青年層に配慮できるのは教団だとの意見があった。教会・教区が生み出した信徒が教団の一員であり続けるために、教団は教会・教区間のネットワーク作りを期待されている。

改定により総会議員数が縮小され、少数意見が全体に届かなくなるとの危惧表明があった。関連して、各教区からの議員数について工夫と配慮が望まれた。

危機感から守りの姿勢に入り、伝道推進の気概が損なわれることが懸念された。今を力の蓄積の時と捉え、喜びをもって伝道することで一致し、献身と献金を行いたいと複数の声が上がった。

協議会の終わりに、雲然書記がこれからの柱とすべき事柄が上げられたことを告げた。それらを軸に三役で話し合い、伝道対策検討委員会でさらに議論を深める予定である。

(原田裕子報)

#### 【4897・98号】▼伝道対策検討委員会▲「基本方針」具体化・「機構改定」議案化

(2019年3月2日)

1月29日、教団会議室にて、第1回教団伝道対策検討委員会を開催した。

この委員会は、前総会期の教団伝道対策検討委員会の継続として常議員会の下に設置されたもので、メンバーは、委員が教団三役、常議員4名、8教区議長、伝道推進室書記の計16名、陪席者として常任常議員および総幹事ほか幹事4名である。委員会設置の目的は、「教団伝道推進基本方針」の具体的な展開を伝道推進室と連携して実施すること、および、教団の伝道を推進しつつ教団機構改定に取り組み、その議案化を図ることである。

議事として、石橋秀雄議長を委員長に、雲然俊美書記を委員会書記に選任した後、第41回教団総会「教団伝道推進と教団機構改定に関する協議会」と、第2回常議員会「教団伝道推進・機構改定に関する協議会」の報告がなされた。

続いて、石橋委員長より、「教団伝道推進に関する件」(①教団伝道推進基本方針の展開を検討する「教団伝道推進基本方針展開検討小委員会」の設置。②教会・教区の伝道の推進に仕え、教団の伝道を推進するための機構改革を検討する「教団機構改定検討小委員会」の設置。③検討内容の教区・教会等への周知を図ると共に、沖縄教区に配慮する)が提案され、協議の後、委員会としてこれを承認し、各4名の小委員会委員を選任した。

協議においては、教団の伝道と財政について、機構の改定と運用面での改善について、教区と教団との間の信頼関係を築くことについて、「機構改定案骨子」をもとに検討を進めることについて、沖縄教区との関係の持ち方について、今後の検討のタイムスケジュールについて等の諸課題を検討した。

その後、石橋委員長が、教団議長として、今年各教区総会で配付する教団伝道推進・機構改定に関する資料の作成のために第3回(臨時)常議員会を開催する意向を述べ、次回委員会において、常議員会に提案する資料の原案を作成することとした。(雲然俊美報)



(2019年3月30日)

第41総会期伝道推進室は前総会期同様、石橋秀雄教団総会議長が室長となり、1月22日、2月15日に委員会を開催した。委員として齋藤篤、中寫暁彦、書記に網中彰子を選任し、担当幹事は引き続き石田真一郎幹事が務める。

第1回委員会では、はじめに石橋室長より、機構改定を更に推進していく展望が語られた。伝道推進室は第37総会期に教団が伝道に進んで取り組み、教団内の諸教会の伝道の進展に寄与することを目的として可決され発足した。主な活動内容は、伝道対策の検討、伝道キャラバンの企画・実施、伝道トラクト・ポスデカの作成、『室報』（伝道推進室ニュース）発行、伝道礼拝・集会等の講師派遣、諸教会の伝道相談への対応等である。

「伝道に燃える教団・伝道する教団の建設」に向けての取り組みは、すべて聖霊の導きにより諸教会で続けられている。室報では誌面でその恵みを報告し、喜びを分かち合った。伝道トラクト4種類は教会入口に備え付ける他、内容に応じて葬儀の際に用いられるなど工夫して活用されている。

今総会期は、教団伝道対策検討委員会に書記が委員として出席し、教団伝道推進基本方針展開検討委員会小委員会に陪席するなど、伝道推進室との接点が増えることから、教団全体の働きについて一層祈りに覚え、見据えながら活動することとなる。

伝道キャラバンに関しては受入れ諸教会との綿密な準備が必要となるため、時間に余裕をもって備えていくこととした。

宗教改革500年を記念して開催された中高生大会、青年大会等を経て、若い世代を中心に様々なネットワークが形成されている。そのつながりを大切にし、また青年に関わる具体的な計画が提示されたときに必要な協力をする事が出来るよう備えていくこととした。

(網中彰子報)

**日本聖公会【日本聖公会 管区事務所だより（2019年3月25日 第341号）】**

**「誰もが癒され、大切にされる交わりに」**

管区事務所総主事 司祭 エッセイ 矢萩 新一

「あなたがたは、このために召されたのです。キリストもあなたがたのために苦しみを受け、その足跡に続くようにと、模範を残されたからです。『この方は、罪を犯さずその口には偽りがなかった。』罵られても、罵り返さず、苦しめられても脅すことをせず、正しく裁かれる方に委ねておられました。そして自ら、私たちの罪を十字架の上で、その身に負ってくださいました。私たちが罪に死に、義に生きるためです。この方の打ち傷によって、あなたがたは癒されたのです。」（ペトロ I 2: 21-24、聖書協会共同訳、2019年度大斎節聖句）

「自己覚知・自己開示」「わたし OK・あなた OK」、「からだの健康・こころの健康」、これらは、管区で行なわれたハラスメント防止・対策研修会で学んだキーワードです。自らの弱さや至らなさをさらけ出すことや自己を開示することは勇気がいることでもあり、自己を分析・理解し、自覚する作業はとて面倒で、敬遠されがちな作業です。良質な関係は、わたしだけが OK、あなただけが OK では成り立ちません。感謝の気持ちを持って、あなたもわたしも双方が人間らしく生きられている空間が教会であってほしいと切に願います。しかし残念ながら、教会の中でも様々なハラスメントが起こっています。一人ひとりの人権・いのちがないがしろにされ、そのことに無関心でいようとしてしまう弱さを誰もが持っています。

私たちは、イエスさまの受けられたその傷によって癒され、心と身体を健康を維持しています。そのバランスが崩れてしまうと、良好な人間関係に支障をきたしてしまいます。

わたしもあなたも神さまから愛され大切にされている存在であることをしっかりと自覚する時、しんどい思いをしている隣人のために祈り、少しでも寄り添う気持ちを持つことができるのではないのでしょうか。日々のあらゆる出来事や出会いの中で、正しく裁かれる神さまに委ね、イエスさまの足跡をたどる者として、大齋節を過ごし、喜びのイースターを迎えたいと思います。

## 日本バプテスト連盟「バプテスト NO.763」(2019.2)

### 連盟 伝道ニュース 【宣教部国内伝道室より】

「喜びや痛みを共に分かち合うツールとして」

〈2017年度教勢報告主要項目〉

	2016	2017	前年比
教会・伝道所数	323	323	0
在籍会員	34,099	33,689	-410
現在会員	14,433	14,212	-221
受浸者	344	321	-23
礼拝	12,066	11,962	-104
祈祷会	3,133	3,101	-32
召天者	214	199	-15
転入者	309	348	39
転出者	312	288	-24
女性(会)	5,328	5,347	19
壮年(会)	2,421	2,386	-35
青年(会)	1,027	1,087	60
少年少女	429	422	-7
小羊(会)	433	457	-24
CS出席	7,117	6,809	-308
経費(円)	207,727	205,337	-2,390
献金総額	267,558	265,418	-2,140

2017年度の教勢報告を7月に各教会・伝道所へお送りしております。全国の教会・伝道所が祈りをもってさまざまな活動を進めておられることを改めて感じつつ、集計を行いました。ご協力ありがとうございました。

主要項目では、どれも減少傾向が続いています。特に、受浸者については、休止中の教会・伝道所があるものの教会・伝道所数(323)を下回り、321人で、初めて1教会あたり1人以下となりました。

他方、信徒活動(各会活動)で前年より増加する項目も複数あり、さまざまな形で教会の活動に加わる人が増えているのかもしれない。

また、主要項目一覧には表れませんが、礼拝や祈祷会といった従来の項目とは別の「その他の集会」に、さまざまな取り組みを報告くださる教会が増えてきています。教会の多様な取り組みが祈りの中で進められ、多くの出会いが起こされているのだろうと想像します。その出会いを共に喜び、分かち合っていたらと願います。

## 日本同盟基督教団「世の光 NO.820」(2019.1)

### 「救霊の情熱」

理事長 廣瀬 薫

「神は、すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます。」

I テモテ2章4節

先日、日本のプロテスタント教会では大きな他教団の方が、「去年の教勢データで、初めて受洗者数が教会数を下回った」と教えてくださいました。つまり、約320の教会に対して、受洗者数が約310と、教会数を下回ったのは初めてだという危機感を分かち合ってくださいましたのです。その時私は、「日本同盟基督教団も受洗者数は低下傾向にあるが、まだまだ教会数を下回るようではない」と答えました。同盟基督教団の状況は、日本のキリスト教会の中では、ずっと良い方だと思っていたのです。

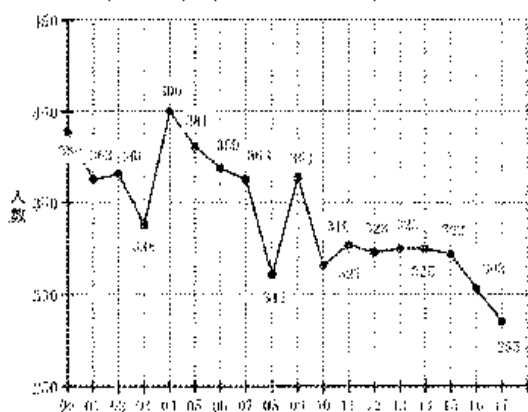
しかし伝道局長にその話を分かち合ったら、すぐにデータを送ってくれました。それが次頁のグラフです。教会数は239、受洗者数は285です。400を超えていた頃（その頃の教会数は今より少なかった）から、長期下降傾向にあります。昔のギャグに、「人の振り見て我が振り直せ」をもじって「人の不利見て我が不利忘る」というのがあったのを思い出しました。このグラフを延長すれば、受洗者数が教会数を下回るのは、正に我が事だったのです。

戦後、日本の教会は「一千万救霊」を掲げていた時代がありました。今、同盟基督教団は「一億二千万宣教」を掲げています。「救霊」の数字ではなく「宣教」が普く行き渡ることを掲げているのは、全く聖書的です。同盟基督教団の「宣教協力理念」3-5に、「宣教の目的は、全ての人に福音を伝え、主イエス・キリストの救いにあずかった人々によって教会を形成し、神の国の完成を目指して、伝道と社会的責任を果たすことである」とあるのは的を射ています。

しかしだからといって、「救霊」の実を度外視してよいわけではありません。聖書は、父なる神さまは「すべての人が救われて、真理を知るようになることを望んでおられます」と教えているからです。今、日本のクリスチャン人口は、減少に転じつつあります。それでいいのだ、とか、現実にそうであるのは仕方がないので、減少に合わせて教会の統廃合や閉鎖の対処を用意すべきだという意見がキリスト教会内に広くあります。しかしむしろ「救霊」の停滞は主のみこころにかなわない状況なのだと受け止めたいのです。

私たちが大切に継承共有している「フランソン精神」（「宣教協力理念」4-8）の②は「未伝地に向かった救霊の情熱」です。私たちはこの新年を、「救霊の情熱」に満たされてスタートしましょう。例えば昨年今年、鹿児島県、三重県、徳島県と、次々開拓伝道が進展しています。その前線で担われている「救霊の情熱」を共有したいのです。今年、青年宣教大会も開催されます。「救霊」を、それが主のみこころにかなうことであるがゆえに、共に祈り求めて行きましょう。現実の傾向に悲観や諦観を抱くよりも、みこころが指し示す方向に自らの目指す方向を合わせたいと願います。

受洗者数・年度別グラフ2000年～2017年



す。みこころにかなう祈りは、主ご自身によって必ず答えられます。私たちにはできなくても、「私を強くしてくださる方によって、私はどんなことでもできるのです」（ピリピ4:13）とある通りです。私たちが誰でもまずできることは、みこころにかなわない現状を見て、自らの不足を悔い改めることです。主は「救霊」の実現を用意してくださっています。そこに私たちが用いられて喜びを経験することを期待しつつ、一年の歩みを信仰をもって始めようと思いをします。

## 日本同盟基督教団「世の光 NO.821」（2019.2）

### 「鍵を握る信徒の献身」

東京基督教大学（キリスト教福祉学専攻）  
土浦めぐみ教会 井上貴詞

今回は、様々な教会によるふくしのミニストリーの実例リストを紹介しました。同盟基督教団内でも子ども食堂などの実践をする教会が増えつつあります。こうしたミニストリーは、実践神学といえるものです。ところが、神学校で実践神学として配置されている科目は、「牧会学」「礼拝学（典礼学）」「教会音楽」「キリスト教教育」「カウンセリング」などです。ふくしのミニストリーに相当する「ディアコニア（奉仕）学」などはまずないのが実情です。聖書とキリスト教の

歴史からいえば当然あることが自然です。そうできなかった理由は、従来の神学校教育は「献身者養成＝牧師養成」と捉えていたため、そこまで射程を広げることができなかったためです。また、もうひとつの理由として「福祉は行政や社会福祉法人などがすることで教会は礼拝、教育・伝道に専念すべき」という考え方が支配的だったことも関係しています。

誤解のないようにいえば、これまでの神学教育カリキュラムが誤りだったわけではありません。人間的な思索や現実、理想や方法論が支配して、霊的な現実と祝福が窒息死してしまうようであれば、それは教会のミニストリーといえなくなります。みことばを正しく説き明かし、聖徒を整え、教会を建て上げていく牧師の存在の重要性と働きの尊さはいうまでもありません。

とはいえ、「実践神学＝牧師の務め」という偏った意識や理解が、信徒が生き生きと参画する包括的な宣教の進展のブレーキとなっていたという事実も否定できません。信徒は、あらゆる日常生活の領域に派遣されており、牧師とは異なる特質をもって能動的に教会と社会に仕えていくことができるという役割（使命）があるのです。いわば「信徒の神学的思索と実践」という営みが存在するのです。東京基督教大学が1990年の開学以来、「教職者の養成」と共に「信徒の献身者と育成」を欠かせない二本の柱にしてきたのも実にそのためなのです。

「日本の信徒には、①『日曜日には欠かさず教会で礼拝し、奉仕もするが、平日はクリスチャンであることを忘れて仕事に没頭する日曜日クリスチャン』と、②『仕事にはあまり意味を見出せず情熱も傾けないが、教会の集会は欠かさず出席し、奉仕も熱心にする』という二つのタイプがある。」かつて著名なクリスチャン労働経済学者が遺した言葉です。極端な例ですが、どちらのタイプも教会と世とを二元論的に考えているとするならば、聖書的とはいえません。

神様は、多様な御霊の賜物を各人に与え、すべてのクリスチャンに（それはたとえ重度の障がいを持つ方であったとしても）それぞれに献身（召命）の道を備えています。その意味と意義は、今日もっと強調されても良いのではないのでしょうか。

宣教師が入れない国に、特定の専門技術をもって入国する「信徒宣教師」は知られていますが、国内でそうした賜物をささげて教会と社会の橋渡しをしつつ、宣教のために働く人を「技術宣教師」「献身者」と呼ばないことは不思議です。たとえば、海外にいる宣教師子弟の教育のために派遣される人を「教育宣教師」と呼びますが、宣教師が安心して長期間の任務を継続できるように、母国の老親を国内で支える人やしくみを「宣教師」とか「宣教の働き」とはあまり意識されません。まさに「信徒の神学」の浅薄さが露呈されています。もちろん、そうした呼称を用いるためには、本人の召命、教会による承認、賜物の聖別と鍛錬の必要性の自覚が欠かせませんが。

聖書を神のことばと声高らかに宣言し、御霊と祈りによって戦後伸長した福音派のキリスト教会は、昨今様々な苦境にも直面しています。「信徒」の位置づけを再考することは、宣教の閉塞感を打ち破る一つの鍵となります。特に「教会とふくし」を考え、実践する上では見過ごせません。なおざりにされていたやもめの配給問題（使徒6章1節）への対処方法が、御霊と知恵に満ちた「7人の福祉実務リーダー（同時に宣教師でもあり、殉教者でもあった）」の選定であり、その結果が教会の成長と祝福（6章7節）となっていったという原点を覚えたいと思います。

## イマヌエル総合伝道団「イマヌエル教報 873号」（2019.4）

### 第74次年会聖会Ⅰ 説教要旨

#### 「真の礼拝を取り戻そう」（イザヤ書6章1～8節）

説教者・内山 勝代表

▼牧師にはいろいろな危険がありますが、気づかないうちに真の礼拝を失うという危険があります。

かつては前日から緊張し、十字架の話しに涙が出そうになることがあったのに、今は淡々と語っている自分がいます。数をこなして行くうちに、礼拝することや説教することに馴れてしまうのです。そんな私がイザヤ六章を読んだ時、強い衝撃を受けました。何度

も礼拝してきたイザヤは、この時、圧倒的な神様のご臨在に触れたのです。私が彼のような経験をしたのはいつだったのでしょうか。

衝撃的な神様体験がなくても礼拝説教を準備すること、プログラムを進めることは可能です。でも、神様はそのような礼拝をととても悲しんでおられるでしょう。

神様とお会いできたかどうかで礼拝の価値が計られるのではなく、それ以外のことによって礼拝の良し悪しを評価しているなら、真の礼拝から遠ざかっているのです。ある人が真の礼拝を失うとどうなるかを挙げています。「①恐れに支配される—自身を恐れ、他人を恐れ、今の状況を恐れ、将来を恐れるようになる。②語るメッセージが平凡になる—神の基準を下げて自分の常識的な考えでメッセージを構成するようになる結果、会衆にとって恵まれないつまらない説教になってしまう。③自分を無感覚にしてしまう—ただ忙しく牧師の仕事をこなすことによって霊的に無感覚になり、忙しく働いていることで自分を満足させようとする。」もしこれらのどれかにあてはまるなら、真の礼拝を取り戻す必要があるのです。

▼では、人がほんとうに神様とお会いするとどうなるのか。

「ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者---」臨在に触れるということは恐ろしいことです。自分がいかに汚れているのかが一目瞭然となってしまふからです。それで、人は神様に触れることから逃げ、他人と比べ、相対的な評価によって満足しようとしています。もし神様と直に触れたら、自分の汚れを感じ、自身を災いだと感じるのです。預言者の唇が汚れているのは致命的なことです。

これ以前、人に向かって災いだと言っている彼自身が、神様から見て災いであるということに悟っていなかったことは致命的です。

真に神様と出会ったら、人は砕かれて謙虚になるのです。「ああ！災いだ！」と叫ぶような悔い改めをしたのはいつのことでしょうか。だとしたら、私は真の礼拝から遠ざかっているのではないのでしょうか。確かに、私に必要なのは神様に触れていただくことであり、その結果本当に神様の前に砕かれることではないのでしょうか。

▼では、神と出会い、神の前に砕かれた人はどうなりますか。

神様は砕かれた悔いたたましいを放置されることはありません。火が彼の口に触れると、きよくされ、神の前に立てる者とされました。その時！神の声を聞いたのです。「だれを、わたしは遣わそう。---」彼は「ここに私がおります。私を遣わしてください」と答えることができました。

神様との出会いが、真の悔い改めを生み、真の悔い改めが真の礼拝へと私を回復します。この恵みを必要と感じているなら、主の御もとに行こうではありませんか。

(北田直人・記)

## 日本ホーリネス教団「JHC Revival 843号」(2019.1)

### 神の宣教(第10回)

#### 〈派遣〉「伝道という社会的貢献」

東京聖書学院教頭 西岡 義行

伝道は、「福音を伝えること」と一般に理解されています。そもそも、「伝道」は英語では Evangelism で、「福音」と訳されるギリシャ語「ユー・アングリオン」から来ています。この言葉は、「良い」(ユー)と「何かを伝える使者」(グリオン)という二つの言葉の合成です。ユー・アングリオンは、ローマ世界では、ホメロス以来、戦争の勝利や何らかの危機を脱出した時に、その良い知らせを伝えた使者への報酬を意味していました。そして次第にそれが、良い知らせの内容を意味する言葉として用いられました。

プリエネ（小アジア）で発見された前9年の碑文には、皇帝アウグストの誕生日を「世界にとって喜ばしい知らせの始まり」と記されていることが知られています。私たちキリスト者にとっては、この「福音」は人類への実に喜ばしい知らせです。しかも、それは、旧約の預言者にも伝えられているものです。イザヤ書40:9には、「よきおとずれをシオンに伝える者よ」とあり、さらにイザヤ書52:7には、「よきおとずれを伝え、平和を告げ、よきおとずれを伝え、救を告げ、シオンにむかって『あなたの神は王となられた』』と言う者の足は山の上にあつて、なんと麗しいことだろう」とあります。それはバビロン捕囚からの救いと解放の良き知らせであり、さらには待望されるメシアである主イエスにおける救いを伝える「良い知らせ」の預言でもあります。これは、イエスが王として来られ、十字架においてその御わざをなされたことによって成就したのです。

神に背を向け、滅びに向かっている私たち罪人は、自分の力でこの現実から抜け出すことはできません。しかし、神は主イエスの十字架の贖いによって、神との関係を回復し、死というどうすることもできない絶望を打ち破り、永遠の希望を届けてくださったのです。この地上の短い生涯は、神が召すそのときまで使い切るものとして、新たに与えられたのです。この恵みによって、主のために生きることが自由にでき、他者のために生きることが自然にできるようにされたのです。

こうして贖われた人々が、主を中心として生き歩むとき、その生きざまは、周りの社会への福音となります。神との関係が回復すると、最も小さな社会である夫婦や親子、そしてそれを取り巻く家庭に和解をもたし、笑顔を取り戻すことができます。造った笑顔ではなく、自然な笑顔です。神に背を向けて歩む現実の家庭や社会に真摯に向き合うとき、この笑顔は今社会がどれほど待ち望んでいるものであるか身をもって知らされます。福音が社会にどれほど貢献するかに目が開かれます。この「良い知らせ」が現代人に伝わる言葉は、「説明」や「説得」というより、福音によって変えられた人の「生の証し」なのではないかと思えてなりません。

## 教会の将来を考える (8)

### 「教会の閉鎖に伴う問題点」

教会教区再編委員会 濱 和弘

ヨーロッパの田舎を旅する映像などを見ていると、時折、使命と働きを終え廃壇になった教会が映し出されることがある。確かに、歴史の中で数多くの教会が、使命を全うしてその働きを終えてきた。しかし、キリストの体としての普遍的で唯一の共同の教会は、地域や時代、そして教派を超えて長い歴史の中に横たわっている。我々はその共同の教会に包み込まれた個々の教会で礼拝を営み、修練し、交わりを持ち、宣教のわざに励む。そしてその個々の教会が使命を全うできなくなった時、教会は静かに幕を下ろす。個々の教会には寿命があるのである。

理屈としては、それは良くわかっている。しかし、現実には教会を閉鎖するというような問題が目の前に起こってくると、その現実を受け止めることは容易ではない。何よりも教会は自分の魂の故郷であり、キリスト者としての自分の居場所でもある。それを閉鎖するというのだから、そこには大きな痛みと苦悩と不安がある。

私自身、信徒として教会を閉鎖するとの決断を迫られた機会があり、そこに起こるさまざまな葛藤に直面した。だから、教会が無くなるというのは寂しいものであり、自分がこれまで仕え、奉仕していた働きが無になってしまうような虚しさがあるだろうことは容易に察しがつく。また、教会を閉鎖した後、どうやって教会生活をおくるのか。他の教会に移ったとしても、そこでの新しい人間関係はどうなるのか。不安は尽きないし、新しい人間関係を構築しなければならない煩わしさもある。

私個人の経験を言わせてもらおうと、自分が通っていた教会が無くなったことは寂しいことであるが、その教会での交わりやさまざまな経験は、思い出として私の心にしっかりと

残っている。人間関係についても、時間の長短はあるが、それぞれの教会の中で新しい関係が築かれてきたように思う。また、かつての教会の人間関係も失われることなく続いている。もちろん、これは一例に過ぎず、一人ひとりの個人差はある。しかし、私が知る限り、教会が閉鎖され教会を移った方々のほとんどが、新しい教会でしっかりと信仰生活をおくっておられる。それは個々の教会の背後に、すべての教会を包み込む共同の教会があるからである。私たちは、この共同の教会に神によって呼び集められた神の民である。だから、たとえ教会が閉鎖されたとしても、新しい教会に移り、そこで神とキリストを仰ぎ見て礼拝をし、修練し、交わり、宣教のわざに生きるのである。

## 日本ホーリネス教団「JHC Revival 845号」(2019.3)

### 教会の将来を考える (10)

#### 「インターネットによる礼拝とその課題」

教会教区再編委員会 大前信夫

千葉栄光教会でインターネットによる礼拝の配信が始まったのは、兼任していた八街栄光教会が、巡回地(伝道所)になることを提案せざるを得なくなった時でした。しかし、動画配信に慣れない牧師が行うのです。「スカイプ」を使用しましたが、何度も上手くいかないことがありました。最初は講壇にノートパソコンと小さなカメラを置きました。この通信ソフトはテレビ電話ですから、通信が一方通行ではありません。相手の様子がモニター画面に現れ、意思伝達が図れます。だから説教中に配信トラブルになり、八街の画面や音声途切れると、「すみません、トラブル発生です。ちょっと待ってください」と説教を中断し、調整することができました。その後、一方的なライブ中継になりますが、インターネットに繋がれば誰でも礼拝に参加できるようにと、使用する通信ソフトを「ユーストリーム」に代えました。しかし、機材の相性などもあり、これもしばしばトラブル発生！さらに礼拝途中、スクリーンにコマーシャルが流れるという、無料のソフトゆえの問題もありました。

試行錯誤の時が続く、現在は使用するソフトを「ユーチューブ」にしています。これまでに比べると格段に扱い易く、トラブルもなくなりました。ただ八街の礼拝は専任の協力牧師が与えられましたので、現在は年に数回のライブ中継となっています。主な利用者は体調や仕事、また、急な所用のため礼拝を休む方が中心になりました。この礼拝動画はしばらく公開していますので、日曜日に忙しくて礼拝に参加できない方が、時間のある時に礼拝を行うこともできます。

便利なインターネット礼拝ですが、それだけでの礼拝出席、交わりのない信仰生活には限界があります。同じ主を仰ぐ教会での礼拝が、一つの主のからだとして教会を、その一つの肢として一人ひとりを育てていくからです。だから愛を学び、神の家族につながる喜びを知るためには、教会の交わりに工夫が必要でしょう。

常駐する牧師のいない兼任教会や巡回地において、グループでこうした礼拝を行うなら、統一した式次第、献金や聖餐への対応の準備も大切です。そして何よりも人です。機材の扱いに慣れた人もそうですが、インターネットでは届かない牧会の務めを負ってくれる人が必要です。人に寄り添い、魂のケアがなされること、これは教会の礼拝がどのようになっても大切だと思うのです。





## 日本ホーリネス教団「JHC Revival 846号」(2019.4)

### 教会の将来を考える(11)

「ヒーローを待っていても世界はかわらない」

教会教区再編委員会 壇原久由

2008年のリーマンショックの時、解雇された人々の宿泊村が、東京・日比谷公園内に作られました。村長を務めた湯浅誠氏は、「民主主義とは面倒でうんざりするシステム」だと言います。

異なる意見を交換し、調整するのは大変な苦勞が伴うからこそ、「誰か他人が決定してくれ。ただし、私の要求を通すように」という態度が生まれます。複雑な利害関係の調整、相手の立場の理解を嫌がると、「水戸黄門さま」のようなヒーローがいれば、問題が解決するという期待が生まれ、「独裁者」「強いリーダー」を待ち望む心理が強くなるそうです。

皆さんの教会はどうでしょうか。教団本部や牧師がヒーローのように、問題をすべて解決してくれると思っているのでしょうか。

湯浅氏は、民主主義の活性化は誰かがその矛盾を引き受けるところから生まれ、自分たちで決めて、自分たちで行動する原則が大切だと語ります。だから、ヒーローを待つのではなく、私たち主権者が立ち上がらなければならないと訴えて、表題の本を出版しました。

これは、教会も同じではないでしょうか。教会はキリストの体と呼ばれています。体の各部分が働きを担いながら一つの体が成り立つように、信徒の皆さんの参加や責任がなければ、成り立ちません。ホーリネス信仰とは「神人協働の信仰」ですから、私たちの側の協力は必須です。

地域の再生や活性化に成功したところでは、どこでも、面倒くさいけれども住民自身が立ち上がり、地域が持つ魅力や価値を見つけ出し、そこにある資源を活かし、情報を発信しています。外部に助けを求めるよりも、自分たちで苦闘しながら実行する喜びを手にしています。

使徒行伝六章では、「御霊と知恵とに満ち、評判の良い人たちが」が弟子の中から選び出され、教会の管理や運営が委ねられました。パウロは信頼できる役員や信徒を選んで、教会の働きを委ねました。ですから、教会の実情を知っている人すべてが、福音の働き人なのです。

牧師、役員、教会学校の教師などの役割の違いはありますが、信徒の皆さん、あなたこそ、教会の苦境を救う一人なのです。ぜひ、働きを担い合おうではありませんか。

## 日本イエス・キリスト教団「JCCJtimes NO.793」(2019.1)

### 第2回 日本青年伝道会議

服部喜望教会 山下大喜

11月22日(木)～24日(土)、第二回日本青年伝道会議が日本福音同盟の主催によって、6年ぶりに開催されました。大会のテーマは「神の国マインドに生きる」、聖句はマルコ1:14～15です。

1日目は、御茶ノ水クリスチャンセンターを会場に青年サミットが開かれ、青年伝道に重荷のある教職や信徒、総勢171名が全国から集いました。内容は、先ず2名の牧師とキリスト者学生会(以後、KGKと表記)、高校生聖書伝道協会(以後、hi-b.a.と表記)の各代表者が、日本における青年伝道の現状と課題で発題しました。その後、参加者が教団教派を超えて34グループに別れて、発題の内容を分かち合い、青年宣教の困難を覚えて祈り合いました。

夜は、青年大会①(参加者264名)。讚美チームが集会をリードし、メッセージを山本陽一郎師(日本同盟基督教団/多治見中央キリスト教会)がされました。聖書はマタイ9:35～10:7、テーマは「神の国と宣教～シャイン、ジーザス社員～」です。私たちは世俗的な世

界にあっても、信仰によって神の国、つまり主の支配の中で、主イエスの僕として生きることができる。一番輝く人生がまさにそれだと語られました。

2日目から会場を山崎製パン総合クリエイションセンター（千葉県市川市）に移し、午前に青年大会②が開かれ、飯田岳師（東京フリー・メソジスト教団／南大沢チャペル）がマルコ1：9～15から「神の国マインドへの招き」をテーマにメッセージをされました。神は御子イエスを十字架につけるほど私たちを愛しておられる。その愛で、今も私たちを神の働きの中（神の国）で生きるように招いておられる。だから、悔い改めて神の招きに応えよう。どんな状況や環境にあっても、神の国の価値観で、つまり神の言葉に従って生きようと語られました。午後には、青年宣教に特化した9つの分科会が開かれ、当教団からは小岩裕一師（横浜栄光教会）が「異端・カルトの予防と対策」の講演をされました。

夜は、青年大会③が行われ、松尾献師（福岡教会／KGK九州主事）がマタイ14：22～36から「神に遣わされて」をテーマにして、みことばをとりつぎました。中高生は受験のプレッシャー、友だち関係等に苦しむ。また青年は99%未信者の日本社会にあって、みことばに生きるために凄まじい葛藤や戦いを要する。ですが、私たちは信仰による祈りとみことばの養いによって、神の国（支配）の下で、信仰の戦いを戦い抜くことができる。だから、神にゆだね、神に遣わされて行こうと語られました。2日目の参加者は総勢454名。

3日目の最終日は、三つの世代に別れて3会場で集会を行いました。中高生はhi-b.a.が、大学生はKGKが、社会人は実行委員が担当して、みことばが語られ、分かち合いやディスカッションの時がもたれました。

全体で総勢579名が参加。私たちの教団からは60名の参加。内訳は中高生3名、大学生7名、社会人34名、教職16名でした。参加者は、教団教派を超えて、神の国が現れた恵みの三日間を過ごすことができました。この大会のために祈り支え、事務や宿泊のご奉仕をしてくださった方々に心から感謝を致します。

## 日本バプテスト教会連合「連合通信 NO.232」（2019.3）

### コンバージ Japan ニュース vol.13

日本宣教団幹事 ジェフ・チャプマン

日本人は、世界で2番目に大きな未伝（「福音が届いていない」の意）のグループです。コンバージは新しいイニシアチブで日本に対する神の召しに応答しようとしています。

第一歩は踏み出され、そのイニシアチブ・リーダーが任命されました。ペンシルベニア州エリー郡のグレース教会の宣教牧師、ブライアン・ルスキー師です。ブライアン師は日本に対するビジョンを持ち、すでにこの5年ビジョン実現のために労しておられます。以下は、ブライアン師からのメッセージです。

「日本国担当のイニシアチブ・リーダーとして、コンバージ国際宣教部スタッフに加わったことを大変恐縮しつつも喜んでおります。日本人は、世界で2番目に大きな未伝のグループです。クリスチャンは人口の1%以下で、ほとんどの日本人は教会に行ったことも、聖書を読んだこともなく、一人のクリスチャンとも関わりを持っていません。イニシアチブ・リーダーとして、私の役割は日本人と共に働く宣教師のチームを立ち上げ育成することです。チームの働きは以下の通りです。

- ・日本人に福音を文脈化して宣べ伝える。
- ・日本人のリーダーを支え、整える働きを支援する。
- ・教会開拓の様々な戦略を推進する。
- ・日本にいるクリスチャンと北米教会の協力関係を促進する。



こうした取り組みを通して、私たちは日本における弟子の増加と新しい福音のムーブメントが始まることを期待しています。」

ブライアン師はまもなくこれらの働きに着手されます。米国コンバージの教会と共に、支援を立ち上げ、日本への神のビジョンを分かちあうブライアン師夫妻のためにお祈りください。

**日本アッセンブリーズ・オブ・ゴット教団「アッセンブリー News NO.761」 (2019.2)**

**【2019年教団の標語と聖句】**

**標語「福音に根ざした宣教的教会を目指して」**

「Be ONE～一つになって～」

理事長 土屋 潔

聖句「ただ、キリストの福音にふさわしく生活しなさい。――あなたがたは霊を一つにしてしっかりと立ち、心を一つにして福音の信仰のために、ともに奮闘しており」(ピリピ1:27)

教団創立75周年(2024年)に向けての指標として、一2万人の信徒一を掲げています。その実現に向けて今年の標語と聖句から2つの点を分ち合います。

**キリストの福音に根ざす**

キリストの福音に根ざした生活とは、どのようなものでしょうか。それは真理の御霊である聖霊に助けられて、キリストが私の内に住まわれているという事実が、生活の中で現実となっていくことです。つまり十字架に架かれたイエス、復活されたイエスという福音によって、今も私と協働してくださるイエスを深く体験していくのです。

当時、新しいローマ皇帝が即位する時に、街中に「王が即位された！」と告げられた言葉が福音でした。それに対してパウロは「キリストの福音」と呼び一真の王はイエス・キリストである一ことを宣言したのです。王の王であるキリストの福音に根ざす時、天国に国籍を持つキリスト者として、上にあるものを目指す希望が与えられます。同時に、主の祈りの一文にあるように一父の御心が地にもなされますように一天の国の栄光と勢いが、全てを支配される王であるキリストを信じるキリスト者自身の生活によって、顕されることをパウロは強く望んだのでした。

**宣教的教会**

教会とはあなたと私であり、神に召された者たちの集まり、共同体です。ゆえに、教会にとって“Be ONE”は必然なのです。主の教会に賦与されている最高の使命である宣教は、牧師や役員、あるいは一部の伝道熱心な者たちに限定されず、教会全体への贈り物なのです。しかも宣教のために、一つになるために聖霊は臨まれ、自由自在に働かれます。今まで以上に、一人の魂、地域の救いのために大胆かつ自由な視点で宣教に取り組む教会へと、体質向上を目指していくことが求められています。その始まりでありカギはあなたが聖霊に満たされ、「真の王がここにおられます！」という福音宣教からなのです。

今、共同体である教会は神と社会からも期待されています。なぜなら教会にこそ「一つ」があるからです。これを可能としているのは、教会規模の大きさではありません。あなたが、所属している主の教会を「私の教会」として深く愛し、指導者と心を一つにして福音の信仰のために励んでいく時にこそ、神は栄光を顕されます。

福音にふさわしく歩む、天に所属する市民として、この1年が豊かなる年でありますように。

## あとがき

梅雨のうっとうしい時期を迎えましたが、皆様お変わりはないでしょうか。

2019年も早や半年が過ぎようとしています。発行が大分遅くなってしまいましたが、ここに第15号を発行することができることを感謝いたします。

今回号の巻頭言は、2011年4月から8年間、日本福音同盟（JEA）総主事の重責を担われ、今年の3月をもって退任された品川謙一師が、「JEA ニュース」（2019年4月 No.53）に掲載された巻頭言を、許可をいただいて転載させていただきました。

「神の国マインド」による「地域宣教協力ネットワーク」を日本各地に構築することは、日本宣教の喫緊の課題でもあります。しかし、宣教協力の必要性は、大分以前から叫ばれてきましたが、何故遅々として進まないのでしょうか。

1960年秋、日本基督教団の招きで来日した『信徒の神学』の著者ヘンドリック・クレマーから、「どうして日本のキリスト者は、同信の友と教派をこえて交わりをしないのか。人口の1%程度しかいない日本のキリスト者たちが、仲間づき合いもせずお互いに無知であり、疎遠であり、場合によっては内輪げんかばかりしているとは、いったいどういうことか。このような現状を露呈しながら、現代日本に伝道しようなどと考えているとすれば、諸君、目をさましたまえ！」と厳しく叱責された時から、事態はどれだけ進展して来たでしょうか。

言うまでもなく、神は、「神の国」支配の拠点として教会を立てられました。その教会が、同心円状に広がっていく本来的な在り方を発揮せず、また同じ地域にある他の教会や団体などと「つながって」共振し合い、さらにその輪の拡大を目指そうとはせず、却ってそれとは逆向きのベクトル、すなわち封建的な「内向きの村社会」を形成し、他との関りを極力避け、権威主義的な「牧師の王国」を築いているような現実はないでしょうか。

そのような教会は、往々にして、それが「当たり前」の教会だと思い込んでいることがあります。一昔前「日本の常識は世界の非常識」と言われたことがあるように、「自分たちの教会で常識だと思っていることが、神の国マインドであるべきキリストの教会の非常識」になっていないかどうか、教会のベクトルは、外に向かって神の国の拡大の方向を目指しているかどうか、今一度自らの頭で聖書的に点検する必要があるのではないのでしょうか。（初穂）

## 献金者名（2019年1月～2019年6月）

◎ 尊いご支援に、心から感謝申し上げます。（敬称略）

金安信、柴田美枝子、島田治夫、寺田文雄、中野覚、柳下弘、  
清瀬グレースチャペル、日本キリスト教連合会、本郷台キリスト教会

## 【お知らせ】

◎ 「JMR 調査レポート（2018年度）」を、4月に発行いたしました。

日本のキリスト教全体の教勢や、教団・教派別の教勢等に関心のある方は、  
下記TCUのウェブサイトに掲載していますので、ご覧ください。

<http://www.tci.ac.jp/info/fcc/jmr>

【セミナーのご案内】



Shohei Yamato

SPEAKER

日本同盟基督教団 土浦めぐみ教会  
顧問牧師

清野 勝男子 氏

演題

『通過儀礼としての葬儀』



Kazuhiro Noda

SPEAKER

株式会社 創世 ライフワークス社  
代表取締役

野田 和裕 氏

演題

『日本のキリスト教会葬の実際』

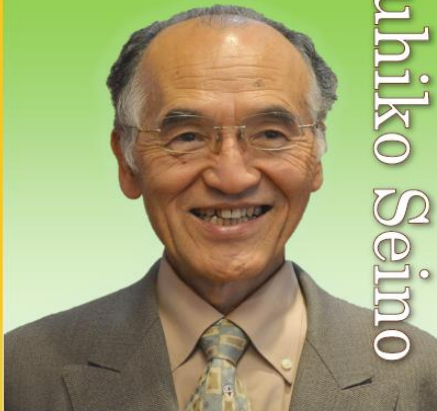
SPEAKER

東京基督教大学 神学部 教授

大和 昌平 氏

演題

『日本の葬儀の歴史』



Katsuhiko Seino

**FCC セミナー** **キリスト教葬制文化セミナー**  
第1回 「キリスト教葬制ディレクターを目指して」

葬儀は、日本の福音宣教において常に正念場でした。キリシタン禁制と共に檀家制度が作られ、「仏式葬儀」が定着してきましたが、今や大きな揺らぎを見せて新たな商業化の波に飲まれつつあります。そんな時代だからこそ、日本におけるキリスト教葬儀とは何かをしっかりと学んだ「キリスト教葬制ディレクター」の養成を目指していきます。教会教職者・信徒の別なく、ご参加を心よりお待ちしております。

日時  
会場

2019年7月15日 月・祝  
10:00~16:00 (開場9:30)

お茶の水クリスチャン・センター416号室  
東京都千代田区神田駿河台2-1

事前申込:4,500円  
当日受付:5,000円  
定員:50名  
最低催行人数 20名  
申込締切 7/1(月)



会場へのアクセス  
JR中央線・JR総武線 JR御茶ノ水駅より徒歩2分  
東京メトロ丸の内線 御茶ノ水駅より徒歩3分  
東京メトロ千代田線 新御茶ノ水駅より徒歩3分



司会/モデレーター 倉沢 正則 氏  
東京基督教大学神学部  
大学院神学研究科特任教授 (宣教学)  
同大学付属国際宣教センター長  
共立基督教研究所長  
日本宣教会理事・事務局長  
日本ローザンヌ委員会委員長  
日本同盟基督教団沼南キリスト教会牧師

主催 東京基督教大学 国際宣教センター  
キリスト教葬制文化研究会  
後援 株式会社 創世 ライフワークス社

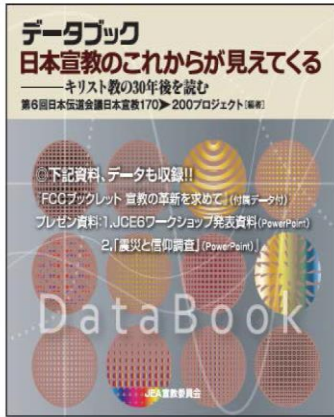
〒270-1347 千葉県印西市内野3-301-5  
TEL:0476-31-5522 FAX:0476-31-5521  
<http://www.tci.ac.jp/>

お申込は裏面を  
ごらんください

【お申込み・お問合せ】  
E-mail:jmr@tci.ac.jp FAX:0476-31-5521

## 【刊行物紹介】

### データブック 『日本宣教のこれからが見えてくる』 CD-ROM 版（好評発売中）



グラフや図がカラー  
表も見やすい  
有用なデータが満載  
プレゼン資料も収録  
定価 1,000 円+税

#### 【CD-ROM の内容】

- 『データブック「日本宣教のこれからが見えてくる」-キリスト教の30年後を読む』
- 『データブック FCC ブックレット 宣教の革新を求めて』（付属データ付）

【編著】第6回日本伝道会議「日本宣教170 ▶ 200 プロジェクト」  
東京基督教大学国際宣教センター 日本宣教リサーチ  
【発行】日本福音同盟（JEA）宣教委員会

【お申込み】住所・氏名・必要冊数・Email アドレスを、以下の連絡先にお送りください。  
なお、書籍代+送料実費がかかります。

E-mail: fcc@tci.ac.jp 又は FAX:0476-31-5521

### キリスト教葬儀研究会

#### 日本宣教におけるキリスト教葬儀 開かれたキリスト教葬制文化を目指して

巻頭言	倉沢正則
一般葬儀とキリスト教葬儀の現状	柴田初男
日本の葬送儀礼の宗教的背景	大和昌平
葬儀論から日本宣教論へ	稲垣久和
近代日本における死者儀礼と教会	篠原基章
一キリスト教葬制文化を形成していくために一	
未信者にも開かれたキリスト教葬式を求めて	倉沢正則
キリスト教葬制文化開拓のケース・スタディ	清野勝男子
付記「キリスト教葬儀に関するアンケート調査」報告書	日本宣教リサーチ
まとめ	大和昌平
コラム 1～5 終活セミナー開催の理由他	野田和裕

NO.10

February 2018



東京基督教大学 国際宣教センター

定価 1,000 円+税  
好評発売中

### 【お申込み・お問合せ】

E-mail: fcc@tci.ac.jp FAX:0476-31-5521

## 感謝のご報告と継続支援のお願い

日本宣教リサーチ (JMR)は、今年の4月で発足から6年目を迎えます。旧教会インフォメーションサービス (CIS) の支援者の継続的なご支援や、新たな支援者の方々のご支援をいただき活動が支えられて来ましたことを心より感謝いたします。

2019年度も、2018年度と同様、「JCE6「日本宣教170▶200プロジェクト」の流れを引き継ぎ、JEA(日本福音同盟)宣教委員会宣教研究部門の一員として、日本宣教の課題である「次世代育成」「地域宣教ネットワークの構築」「教会の再生」に取り組んでいきます。

どうか引き続き JMR の働きにご期待くださり、更なるご支援を賜りますよう、よろしく願いいたします。

JMR の活動は、東京基督教大学に寄付される指定献金によって賄われます。会員には一般賛助会員と特別賛助会員があります。各会員の要件と提供される成果物は以下の通りです。

(1) **特別賛助会員**：趣旨に賛同し、支援してくださる教団・教派、宣教団体等

- ・一口 30,000 円 (何口でも)
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年2~4回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年1回「JMR 調査レポート」のご提供

(2) **一般賛助会員**：日本宣教に重荷と関心を有する個人、教会等

- ・一口 2,000 円 (何口でも)
- ・シンポジウムや研究会・研修会等の開催のご案内
- ・毎年2~4回「日本宣教ニュース」のご提供
- ・毎年1回「JMR 調査レポート」のご提供

### 日本宣教リサーチへの支援金は、税制優遇措置が受けられます

東京基督教大学への寄付金(献金)は、税額控除制度の認定を受けているため、税制上の優遇で還付金が最大で寄付金(献金)額の約50%となります。

詳しくは、☎0476-46-1131(TCI募金係)までお尋ねください

郵便振替口座:00110-5-575648 学校法人 東京キリスト教学園明日の宣教者育成募金

- \* お振込みの際には、振替用紙に「**日本宣教リサーチ 指定**」と必ずご記入ください。  
(振替用紙がお手元がない場合はこちらよりお送りいたします)



東京基督教大学 国際宣教センター

日本宣教リサーチ

**【Japan Missions Research】**

〒270-1347 千葉県印西市内野三丁目 301-5  
学校法人 東京キリスト教学園 東京基督教大学 国際宣教センター内  
TEL: 0476-31-5522 FAX: 0476-31-5521 E-mail: jmr@tci.ac.jp  
<http://www.tci.ac.jp/institution/fcc/jmr>

日本宣教リサーチ代表 山口 陽一 (東京基督教大学学長)  
日本宣教リサーチ研究員 柴田 初男